

AI 運用不可欠な時代到来へ

大木昌光取締役運用部長兼チーフ・ポートフォリオ・マネジャーに聞く

準備段階として不断なシステム精度の向上目指す

■異質なポートフォリオの中身

私は日本株ファンドを6本運用しているが、その中で「MASAMITSU データセクション・ビッグデータ・ファンド」はかなり異質な形となっている。ポートフォリオの中身が違う。ソーシャルやAI（人工知能）で出てきたものは、最終的に人間の目として私がチェックを入れるが、よほどおかしいということがない限り、それを極力採用する方向で動いている。

私がほかのファンドで買いを入れている銘柄を、当ファンドはカラ売りすることがある。例えば、ある銘柄は、短期は良くて長期は悪い、またその逆もある。その場合はどうするのか人間の判断はありつつも、AIとしては同じ基準で抽出してきていることで、彼らの基準で見た時にあまり長期ではないはずで、数週間から数カ月のレンジでAIは見ている。私は、人間の目で短期の時も、数カ月の時も、3-5年の長期で見るともありさまざまなものが入っている。その意味でAIの基準はかなり明快になっている。そこで矛盾したものが出たとしてもそれはそれで尊重する。ファンドがスタートした当初、これはまずいと思ってやめたりしていたが、精度が上がってきたことで、現在は受け入れるようにしている。

■AI運用と棋士

将棋や囲碁で人間がAIに勝てなくなりつつある。運用ではまだ勝てなくなっていないと思うが、当ファンドは、将棋や囲碁で人間がAIに勝てなくなりつつある過程を運用で先取りする形になっているのではないかと。

今年に入ってプロの棋士がAIに勝てなくなってきたということは重要な事である。藤井聡太さんが将棋の世界に登場して、今までの棋士と違うポイントが一つあるとみている。今までの棋士は、人間の過去の対局をいろいろ勉強してきて、それを基に自分の打ち手を考えている。藤井さんがほかの人と違うのは継続的にAIと対局を積んできたことである。AIと対局を積むことと、人間の過去の棋譜を見に行くことと何が違うかというと、人間の発想というのは、10手先や20手先を完全に確率的に読んでいくことができないことで、ある程度の感覚でやっていると思定される。ある程度は感覚でやっとうまくいったということをほかの人も勉強しているが、先人たちがやって

きたものがその前提にある。

AIはそうではない。人間がそう打つからというのではなく、確率的にこれをこう動かした方が良いということでやっているはずである。最近のある対局で、AIが最初から王将を動かしたということがあった。それは人間の常識からはあり得ないことであるが、AIからすればおかしくない手である。今まで人間がこうした差し手が勝つセオリーではないかと考えていたものが、もっと外側にもっと広いセオリーがあるのかもしれない。その部分を藤井さんが踏み込んでいるのではないかと。

■AI運用の将来性

チャート分析やファンダメンタル分析をやっているファンドマネジャーの方々は多いが、こうした方々や、私がやってきたのは、AIの世界からすると必ずしも正しくないのではないかと思うところがある。あるいは正しいかもしれないが、もっと効率的に何10倍、何100倍の速度でいい銘柄を抽出できる可能性があるということがあって、それを運用の世界でも体現したい。正確には予測できないが、5年後か10年後にはAIを使わないファンドはなくなるのではないかと。AIで完結するか、そこに人間がかかわるかの違いはあるにしてもAIを使わないと体をなさないという時代が間違いなく来るとみている。

その時代が来るという予測の下で今何をしておかなければいけないのか。今は準備段階に入っていて、その答えを導き出そうと思っているのが、この「ビッグデータファンド」と、ご理解していただければと考えている。その意味でも不断にシステムの精度を上げていこうとしている。その中身は一点にとどまっているわけではなく、毎月進化している。これだけAIが進化していることによる必然的な未来に対してかなりいい手を打っているファンドになっていると思う。当初は試行錯誤を続けてきたが、今後は相当期待できる。

■AI、既にファンドマネジャー超える部分も

ファンドマネジャーが要らなくなることは可能性としては十分あり得ると考えている。金利上昇が世界的に起きていて、グロース株からバリュー株への流れとなったが、この流れは初期段



階からとらえることができるかもしれない。何か違いが起きていることを認識することは、人間の目では不可能ではないか。ファンドマネジャーの仕事は今後、こうしたことが起きるとの予測から成り立っているとすれば、予測をキャッチするのが最も早いファンドが勝てるわけで、人間の目で見える部分での勝負を超えた戦いになってくる。

もちろん人間的な発想は必要で直観的な部分はAIとは別だが、通常のパターンでみた場合、人間が簡単に予測できるわけではない。その予兆をとらえていくことがファンド運用の基本とすれば、人間は不得手なのではないか。また、人間はバイアスの塊で、ファンドマネジャーも得意分野と、不得意の分野がある。その意味ではAIは各セクターが均一であり、不得手がない。そこでAIはファンドの中である程度の存在感を持たないといけないのではないかと。今年に入って当ファンドに出てくる銘柄を見ながらやっている、ある部分において人間は超えられたと思うことがある。

■ファンドマネジャーの10年後の姿

10年後になくなる仕事としてファンドマネジャーが時々登場するが、その半分正しいと思うのは、日々の運用というものはいらなくなるかもしれないからである。半分間違っていると思うのは、このシステムは完成がないことで、完成に向けてはIT会社だけでなく、運用に携わっている人間がいいシステムに作ることに對して能動的にかかわる必要があるからである。現在、私・大木昌光がファンドマネジャーとして運用に携わっているが、将来、AIを使ってこういう効果を求めてこういう運用していきますというような、ファンドのプロデュースが仕事になって、日常的にはほぼ何もしないというようなことになってくるのではないかと。もっとも、現段階ではAIによる完全自動運用は不可能と考えている。